



若者

## 研究室生活で得たもの

三吉新介\*

私は学部4年、研究室の最も下っ端である。順調に進学してきた人とは2年遅れている。高校時代（大阪府立四条畷高等学校）、試験のたびに発表される席次では、最下位を何回か経験し、さすがにその日だけは劣等生であることを再認識し、2～3時間勉強するという程度であったから、卒業後当然、ストレートに大学に受かるなどは夢にも思わず、最低2年は費やさねばとても国立大学など受かるまいと考えていた。

ところが浪人して一年目に、思いも寄らず大阪大学工学部醗酵工学科に合格してしまった。ここを志望したのは、特に自分でこういうことをしたいという意志があった訳でもなく、通っていた予備校の両隣の席に居た人が共に前年度不合格になったというので印象深かったからである。私にとってこの合格は、今まで自分を劣等生だと信じ込み、大学を選択することなどは、秀才たちの特権であるという考えを一気に吹き飛ばし、自分の進路を決められるという自信を持たらした。端的に言えば、劣等生に変な自信をつけさせたようなものである。そして私は、大学に入って半年もした頃、憧れの医学部に入ろうと決心し、退学願いを持って、クラス担任の物理の助教授に合いに行った。

その先生は人生についていろいろ話をし、私にアドバイスして下さり、最後に、何事も始めたからには失敗はつき物であるから不合格となってもまた相談に来なさいとおっしゃられた。そして私は、未踏の地に挑む勇者の様な気持ちで退学願いを手渡した。今度は、自分の進路に対して強い意志を持ち、真に大学を目差す者として、受験勉強もそれなりに行き、自信もあっ

たのだが、力及ばず3点差で不合格となった。非常にショックだった。あの先生に、また相談に来いと言われたことが私には大きな支えであり救いだった。先生のところに行くと、彼は私の退学願いをまだ机の引き出しに入れたまま、それを取り出すと真二つに破り、勉強しろとおっしゃった。また相談に来いとおっしゃったのはこういう意味だったのかと思うと同時に、この貴重な経験を生かし、この時から自分の進路を醗酵工学と決めた。

結果的に私は、高校時代と同様に大学も一年間授業をほとんどさぼった劣等生として通い始めることになった。但しそれ以後授業は全くさぼらなかつた。

そうしているうちに次第に醗酵工学に興味を持ち始め、4年の7月からいよいよ研究室生活が始まった。私は、物理や数学を得意としていたが、研究室はあえて苦手の酵素学及び生化学を看板とする岡田研究室を選んだ。これもまた未踏の地に挑む勇者の様な気持ちと、研究室紹介の時に岡田先生が、うちは醗酵工学の基礎をやっているとされたことがその理由である。しっかりと基礎を把握しようと思って入ったが実際に研究室に入ってみると、私の知識など、基礎の基礎もなく、これから学ぼうとするのは言うなら未踏の基礎であった。

卒論のテーマは、補酵素の固定化に関する研究であるが、その実験方針を決めるのに約2か月もかかった。助手のト部先生に私自身で考えろと言われたからである。つまり発想を展開していくことを身に着けねばならないということなのだが、はっきり言って、酵素のことも生化学のこともその基礎的なアウトラインを知っているに過ぎず、まして補酵素などほとんどわからないこの頭で、反応機構などをすべて熟知した上での実験方針を立てると言う訳であるから

\* 三吉新介 (Shinsuke MIYOSHI), 大阪大学, 工学部, 醗酵工学, 岡田研究室,

多少の時間はかかるかというものである。とにかく腹を決めて勉強するうちに、ようやく先生の言わんとする所がぼんやり解ってきた頃、就職試験の季節がやって来た。私は、同じ業界の二社を受け、一社受かり一社落ちた。落ちた方は、比較的歴史のある会社で、受った方は比較的新しい会社である。(と言っても昭和11年設立だが。)対称的であったのは、面接で卒論について尋ねられた時、私が、現在試考錯誤の真最中だと答えると、落ちた会社の面接官は、全員大声で笑ったが、受った会社の面接官は、何が問題点なのか詳しく尋ねてきた。会社によって随分違うものだと社会の難しさを感じたが、いずれにしても内定をもらって、ひとまず安心した。試考錯誤ばかりの私に理解を示してくれた会社であるから、意外とその会社に相性が良いのかもしれない。

さて、実験方針の方であるが、それから自分なりに考えて、先生とディスカッションするつもりが、あっさりと了解され採用されてしまった。私の様な未熟者の意見を採用して下さるのは有難いことではあるが、かなり責任を感じる。その責任を果そうと実験し始めたが、ただ何といっても実際に行うのは4年の私一人であるから、そうすんなりと行ってくれるはずがない。と言って実験すること自体は全く苦にならない。実験結果がどうであろうと、特にそれが自分に不都合な結果となっても、成果の見られないデータは、それでネガティブな意味を持っていると言われたからだ。結果を恐れない気持ちだが、私を走らせてくれるので実験は実に楽しい。走っているということは気持ちの良い事である。私は毎日20kmランニングしているが、走った後の爽快さは何よりもすばらしいと感じる。しかし、実験に関しては、どんどん前に走っていけるとは限らない。回り道がかなり多くあり、12月の末の中間研究発表の時までにデータらしきものはほとんどなかった。私は補酵素を固定化するために、高分子化することを目的としていたのだが、それに至るまでのステップで妙な副産物が大量にできて弱り果てていた。ただ微量ながら目的物も合成したので、このデ

ータをもとに中間研究発表に備えた。私と同様な焦燥感を持つ人も数人いた。私は取りあえず、本来の目的についての結果と、時間潰しの意味も兼ねて、例の副産物について述べた。

その時、岡田先生が冗談ぽく、これは新しい固定化補酵素になるかもしれないな、とおっしゃった。目的物でないから私としては無駄なことばかりしていると感じていたが、別の見方からすれば何らかの成果かもしれない。それよりも私は、今まで道が行き止まりになって一步も前に進めず焦っていたのが、確かに前には進んでいないが、今まで来た道の幅を広げていたのではないかという気がしてほっとした。つまり道幅が広がったために、大型車で資材を運搬でき難所を越えることもできようかというものである。難所さえ越えればまた前に突っ走れる。とにかく無駄なことをしていたのではなかったという気持ちになった。

今度の私の実験は、卒業まで体力との勝負になりそうである。だが充実した生活になることはまちがいないだろう。私はこの研究室生活で実験の量よりも多くの何かを得ると思う。それが何かは解らないが与えられた多くのチャンスを生かすことによって得られるものに違いない。

今回のこの機関紙の投稿に関しても研究室に依頼があり、上の人を差し置いて私などが投稿すべきではないと思ったが、与えられたチャンスを逃がさず生かして行こうとするのが若さであると割り切って投稿させていただいた。私たちの様な研究室の最も下の者にもあらゆるチャンスを与えていただけることに非常に感謝している。

期待に応えるということは精神的にかなり重圧ではあるが、それ故にやる気が起こり、試考錯誤を繰り返しながら、少しでもその期待に答えようと努力することで、一步一步前進していくのであろう。

私の卒業研究も雑誌に投稿するそうであるが、今度はその英作文を書いてみるかと先生に脅かされている。チャンスとはまさしく試練である。